

大濱信泉プロジェクト『勇気づけの教育』の推進（８）

～ 「関わり方を変えると未来が輝く」 ～

石垣市教育委員会 指導主事 小林弘樹

米津玄師・三木谷浩史・スティーブ・スピルバーグ、この有名人の共通点は何でしょう？それは、発達障害があり、そのことを自身で公表をしているという事です。

発達障害とは、自閉症・注意欠如多動症・学習障害などに代表される、先天的な脳機能障害を原因とする障害です。最近では研究や理解が進み、ひと昔前であれば「少し変わった子」と認識されていた子どもが発達障害ではないかと思われるようになってきたり、検査を受ける機会が増えたりすることで、発達障害と診断される子ども達は全国的に年々増えています。石垣市においても、発達障害についての理解の広がりや深まりから、その子にあった特別な支援を受けている子ども達の数が増えています。

発達障害は、できない（苦手な）事がある半面、できる（得意な）事も多くあることから「見えにくく気づきにくい障害」とも言われています。そのため、自分勝手・わがまま・やる気がない・怠けている等と勘違いされることが多くあります。このような無理解や誤解は、みんなと同じことを強要したり、苦手な事を反復練習させたりという、不適切な対応につながります。これらの対応が継続的に行われると、失敗が続き何度も注意を受け続けた子ども達は、自信を失って「自分はだめだ」と思いこみ、自己肯定感が低くなります。さらに、状況が悪化すると、いじめや不登校といった二次障害に発展することも考えられます。このような状況で困っている子ども達にこそ、現在、教育委員会が推進している「勇気づけの教育」が必要です。

ではどのような支援が望まれるのでしょうか。それは、失敗が起こる（叱る・注意する）場面を極力少なくし、成功体験（褒める）を多くすることです。具体的には、大きな目標を達成するための過程を細分化し、小さな課題をいくつも設定してあげることです。これを「スモールステップ」といいます。このスモールステップの支援を成功させるために重要な事は、細分化した小さな課題の難易度にあります。「みんなができてから」「これぐらいはできてほしい」という、思いこみや願望で設定した課題は難易度が高く失敗につながります。逆に、闇雲に小さくし過ぎた課題は難易度が低く達成感が得づらくなります。最も子どもが成長する難易度の課題は、「その子が少し努力すれば達成できる課題」です。このような課題の設定と、達成に導くための有効な支援は、一番近くで見ている親や先生にしかできません。子どもの実態と気持ちに寄り添ってできたスモールステップの階段なら、どんな子ども達も意欲を持ってどんどん登っていきます。さらに、その小さな一步一步を褒めてあげることによって、自尊感情が育っていきます。

また、褒めることは、子どもだけではなく褒めた側にも良い効果があります。褒められた子が喜んだり、やる気を出したりしている状態を見ることで、褒めた方も自分の「成果」を感じ、自尊感情が高まるのです。

発達障害というものは、その子の一つの個性です。「こだわりが強く協調性がない」は「関心のある分野には高い集中力を発揮する」という個性です。「わがままで自分勝手」は「独特な想像力や感性がある」という個性です。その個性が短所に見えてしまうのか、長所とし

てとらえることができるのかはその子に関する親・先生（支援者）や本人次第です。冒頭に例を挙げたように、早い段階から適切な支援を受け、自分の特性と上手に付き合うことができれば、社会的な大成功を成し遂げることも十分にできるでしょう。

「みにくいアヒルの子」の主人公のように、「周りに合わせてアヒルになれ」とみんなと同じような支援をいくら続けても白鳥の子はアヒルにはなれません。「頑張っアヒルになろう」とどんなに努力しても白鳥の子は白鳥にしか育ちません。白鳥の子だけが持つ個性を活かし、白鳥の子だけが得意な分野を伸ばしていく。そんな関わりができると子ども達の未来も輝いて見えてくると思います。